

# 火を使って建てる

「ラコリーナ：銅屋根、草屋根、栗百本、草回廊」

設計=藤森照信+中谷弘志

## いのちを見つめる場所

——たねやグループと藤森照信氏の建築

山本昌仁[たねやグループCEO]

参照 | 本誌pp.4-5

私たち〈たねやグループ〉の拠点〈ラコリーナ近江八幡〉は琵琶湖の東岸、近江八幡市にあります。肥沃な平野が広がり里山が点在する、美しい景観と自然の豊かさに恵まれた土地です。田んぼに水が張られる時期にはあたり一面が琵琶湖までつながる広大な水鏡となり、この地が水の恵みに満たされていると実感できます。

戦国時代には日本統一の要所と考えられ、数多くの大名たちがこの地を目指しました。中でもいち早くヨーロッパ文化を受け入れキリスト教を保護、自由な経済活動を目指した織田信長が建てた安土城は本格的な城郭建築の先駆けで、その独創性にはイタリア人の宣教師たちも大いに驚かされたと伝えられます。近江八幡は信長の死後、豊臣秀吉の甥、秀次によって開かれた城下町です。住人の多くは安土から移ってきた人々で、後年近江商人とよばれるようになる彼らは全国に独自のネットワークを作り、近代化していく日本経済の基盤をすでに江戸時代に築きました。市街地には秀次によって築かれた美しい堀

が流れ、琵琶湖をめぐる水運の拠点としても栄えました。現在では映画やドラマの撮影場所としても知られ、たくさんの観光客がおとずれます。

私たち〈たねやグループ〉は、明治5年からこの地で菓子舗をいとなみ今年で145年になります。店舗のひとつ日牟禮乃舎は八幡堀のほとり、日牟禮八幡宮の境内にあります。市民の誇りであり街のアイデンティティでもあるこの場所に店を構えることは、私たちの仕事がこの土地の歴史と文化、ここで暮らす人々のいとなみと切り離せないと考えてきたからにはかなりません。

10年ほど前に入手した土地は、旧市街から徒歩20分ほどの場所でした。面積は11.5ヘクタール、菓子舗が使う土地としては十分すぎる面積です。八幡山を背にし、目の前にはラムサール条約の保護湿地となっている〈西の湖〉と水郷が広がります。里山と美しい水辺、畑と田んぼが広がるその風景はまさに私たちの原風景でした。私たちはこの場所で、地元の文化と歴史、町の人々とその暮らしを今まで以上に見直し、それを支えてきた豊かな自然との一体感を感じながら商いをするべきだと考えました。なぜなら、私たちが作るお菓子とは、すべて田や畑の実りから生み出されるものだからです。この豊かな実りをもたらす環境があったからこそ、私たちは長きにわたりこの地でお菓子を作り続けてこられました。そのことを忘れずに次の世代へ、その先の世代に申し送るために、新しく作る建築物はそのデザインはもちろん材料や工法を含めたすべ

ての点で自然との一体感と歴史性を表現するものでなければいけないと考えたのです。同時に、自然と人のいとなみが長い歳月をかけて作りあげた里山や水郷の景観に私たちがこころ癒されるように、この場所に立つ建築がここに暮らす人たちのよろこびであってほしいと思いました。

第二次世界大戦以降の70数年、日本は経済成長を最優先の目標として発展してきました。しかしその結果、故郷の風景は切り刻まれ、海も山も川も湖もその多くが公害に苦しめられました。人々は自分自身をいたわることを忘れ、家族と過ごす時間も楽しめないほどに疲れ果てています。そのような国を、生活を、いったい誰が求めたのでしょうか。私たちはいま、全力で自分たちの暮らしを立て直さなければならない。今を逃しては、私たちはこの国を未来の子どもたちに自信を持って手渡すことはできなくなってしまう。たねやグループの経営者として、私は常にそのような焦りを感じてきました。地方の小さな企業が、その商いが従業員とお客様の暮らしを豊かにするにはどうすればよいのか。経済成長というベクトル以外の、暮らしの中で実感できる豊かな自然を分かちあうことはできないのか。お菓子とは人が生きるために必須のものではありません。だからこそ、私たちの商いはお客様の暮らしに寄りそるものであるべきです。同じように、お菓子の材料を提供してくださる生産者たちにも寄りそう必要があるので。お菓子とは野菜であり果実であり土であり水である。つまり、お菓子の原点は私たちをとりまく自然そのものな



田んぼより見る

無断での本書の一部または全体の複写・複製・転載を禁じます。  
copyright© 2007-2017 Arnoldo Mondadori Editore  
copyright© 2007-2017 Architects studio Japan

のです。私たちの商いはその哲学を表現するものであるべきだと私は考えています。

建築家・藤森照信氏との出会いは大きな衝撃でした。藤森氏の建築は、私には自然そのものに見えたのです。それは人間によって建てられたものではなく、みずから地面から生えているものようでした。それは栗の柱や土の壁、鉄や大理石など、藤森氏が好む自然素材がふんだんに使われているから、というだけではありません。藤森氏が作り上げるフォルムが、風に揺れる木のシルエットや水面に広がる波紋のような自然にしか作り出せない種類の美しさを持っていると感じました。最初に藤森氏から〈草屋根〉のスケッチを提示されたとき、建物がひとつの丘に見えました。丘を模倣するのではなく、人が丘や森の木々、草花を見ると感じたくなると感じ出せるような建物でした。心が躍りました。この建物に入つてみたい、この建物がある場所で過ごしたいと素直に感じました。その一枚のスケッチをきっかけに、私は〈たねやグループ〉の新しい場所のすべてを藤森氏にお任せしようと決意しました。そしてその決意は間違っていなかったと確信しています。

2015年1月、メインショップ〈草屋根〉が完成。2016年6月本社〈銅屋根〉、7月にはその間に橋渡しするショップとカフェ〈栗百本〉、そしてそれら全体をつなぐように田んぼを抱く〈回廊〉が完成しました。田んぼでは実際に自然農法で稲を育て、お菓子や食事の材料として使います。田んぼには虫や鳥、小動物が集まり小さな生態系が生まれつつあります。この場所を訪れたお客さまは思わず「わー!」と歓声をあげます。子どもたちはみな走り出します。理由は人ぞれぞれでしょうけれど、みなさんが間違なく感じているのは、自分自身の中にある〈いのちがよろこぶ感覚〉ではないでしょうか。

本社の窓からは、生き生きと田んぼや畑を世話するスタッフたちの姿が見えます。お客さまが笑顔で散策する姿も見えます。「豊かさを分かちあう」とは、まさにこの〈いのちがよろこぶ感覚〉を分かちあうことだったのではないか。藤森氏と一緒に作り上げた空間を人々が行き交う様子を見て、日々そのことを実感しています。自分たちはこの感覚を手がかりに先に進んでいく。

この空間を作るのは藤森氏しかいなかった。私はこの世界にただ一人の、独自の感性を持つ建築家と出会えた幸運に感謝しています。

無断での本書の一部または全体の複写・複製・転載を禁じます。

copyright© 2007-2017 Arnoldo Mondadori Editore

copynght© 2007-2017 Architects studio Japan

## 神の造り給うた自然と

## 人のつくる建築の関係をどうするか

藤森照信

参照 | 本誌 p.8

日本を代表するお菓子の製造販売会社(たねやグループ)の本社と旗艦店などの複合施設として作られた。施設全体の名はイタリア語に由来し(ラコリーナ)といい、その中に入る旗艦店は建築の姿にちなんで〈草屋根〉、本社屋は〈銅屋根〉、カステラショップは〈栗百本〉、回廊は〈草回廊〉と名付けられている。

私は、日本の近代を専門とする建築史家としてながいこと研究と執筆に邁進してきたが、1991年、45歳の時に初めて設計を手がけて以来、70歳となる今日まで25年間、歴史研究と設計の二足の草鞋を履いてきた。

建築家としての25年間のテーマは一貫し、神の造り給

うた自然と人の作る建築の関係をどうするか、だった。20世紀建築は、両者の関係が理論上も实际上も断切しており、そこに危機感を覚えたからだ。

そして、両者の断切を克服するため、「科学技術に自然を着せる」という考え方へ至り着いた。具体的には、

①——構造体は、力学的に強い鉄とコンクリート造もしくは科学技術を駆使した木造とし、一方、その表面は、人の皮膚感覚には合うが力学的には弱い木、土、草、石といった自然素材を使う。

②——建築の屋根や壁に植物を植え付ける。

この2つの方法を25年間にわたり、実践し、①については満足のいく成果を上げることができたが、②については失敗の連続だった。日本のように植物が年に2mも伸びるような気候では、技術的にも費用上も決してメンテナンスはやさしくないからだ。人間は月に何回かしか植物のことに注意を向けないが、植物は365日、24時間、建築を越えて繁殖することしか考えていないのだから仕方がない。

しかし、このたびようやく、①についても②についても十分な結果を得ることができて嬉しい。

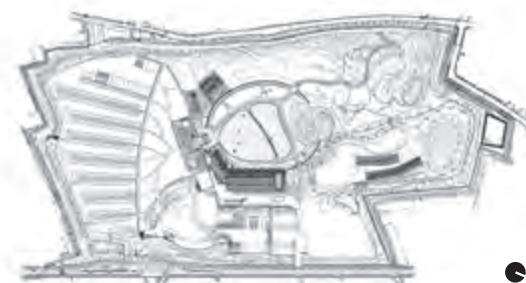
加えてもう1つ大きな成果を上げることができた。

## | ③——建築と庭の一体化

である。建築と庭の一体化は、普通の建築家や造園家やランドスケープデザイナーが考えているほど易しくはない。建築の足許から庭を経て周囲の自然まで連続的につなぎ、なおかつ建築という人工物の存在も際立たせなければならない。建築の存在を自然の中に埋没させていいなら簡単だが、神の自然と人の建築の両方を好む者としては、それはできない。

この広大な敷地は、大自然の精霊が宿る〈八幡山〉のまさに直下にあり、建築と自然と歴史の一体化は守らなければならない。ラコリーナという命名も、この地の歴史的、宗教的由来を知るイタリア人ミケーレ・デ・ルッキによりなされている。

私はかねてより、庭という分野に深く心を寄せ、江戸時代にいわれた「庭は末期の目でみるべし」の言葉に導か



全体配置図



土による模型製作:焼成に立ち会う藤森氏(左)

## 外被のバリエーション



入口側ファサード



背後のブドウ畑より見る

中庭

を通してのみ、水平の線条模様が、じつは尋常ならざる高度な建設技術を使った結果だと気付くことができる。

セメラーノは、土とボゾラン(多孔質の凝灰岩か火山灰)を練ったものをイグサ類の下地に塗り広げ、部分的に火で焼いて壁体を作った。こうした工程の効果は、外見だけでは十分に説明できない。ヴォリューム群を囲み異なるレベルをつなぐスロープが、土中に消えて、将来的にこの施設に予定されている地下への展開を強調するのと同様に、壁に施されたじつに独創的な処理——明瞭に母性的な水滴型の開口部をくぐると、折り曲げた仕切り壁で囲んだ屋根のない「ポルティコ」につながる——によって、多彩な素材と技術でできたこの建物に、時の経過によつてのみ最終的なフォルムが決まるという特質を与えた。しかしながら、それは安定したフォルムにはならず、時間によって変化するフォルムになるはずだ。外被の塗料が剥がれ落ち、余分なイグサが枯れ、陶製のアラベスク模様やざらざらした下地の上にはびこる草を甘受し、最

終的にそうなるであろうもの、つまり地表に浮かび上がる足跡の様相を呈することだろう。

作品:アトリエ・マルコ・バニヨーリ | 設計:トティ・セメラーノ

設計チーム:Stefano Zanardi, Ludovica Fava, Salvatore Musarò, Stefano Sabato, Iride Filoni, Stefano Antonello, Andrea Piscopo, Gunar Thom, Caterina Zaccaria, Joao Loureiro

現場監理:Luciano Scali

コンサルタント:Antonangelo Schipani(構造),

Giovanni Barbieri(熱工学)

施工:Rubner Holzbau(木工), Edilsavy snc(建設)

建築主:Marco Bagnoli

規模:敷地面積 10,788 m<sup>2</sup> / 建築面積 2,000 m<sup>2</sup> /

建築容積 9,049 m<sup>3</sup>

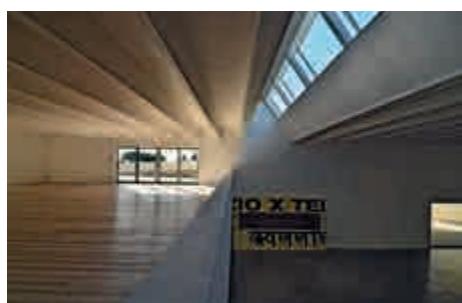
スケジュール:設計 2007-11年 / 施工 2013-16年

所在地:località Villanova, via Vicinale delle Querce,

Montelupo Fiorentino (FI), Italy



中庭での展示



展示ホール

### 「YKK80ビル」設計=日建設計

今日、クオリティはどこで生みだされるのか

アウグスタ・マン

参照 | 本誌 pp.34-41

YKK株式会社は巨大な企業である。1934年に設立され、ファスナーとスナップ・ボタンの製造に革新をもたらした。2016年の段階で従業員数は44,000人を超える、71ヶ国に拠点を構える。1945年から事業を多様化させたYKKグループは、現在、建材市場に進出し、大規模オフィスビルおよび一世帯住宅での使用を想定した多彩な建材を製造するほか、機械市場向けに工機技術本部が専用機械を供給している。さらに不動産市場での活動も目覚しく、また農業の分野でも多様な事業を展開している。

今回取り上げるYKK80ビルは、YKKおよびYKK APの本社機能を置く新社屋で、東京の秋葉原という混雑したエリアに竣工した。オフィスビルでは日本で初めてLEED-CSの最高ランクである「プラチナ認証」を獲得した。YKKが設計を委ねたのは日建設計である。この大規模な組織設計事務所は、20世紀初頭に野口孫市らが大阪図書館(1904、現・大阪府立中之島図書館)の設計を手がけたのを機に設立された住友本店臨時建築部を起源とする。今日、日建設計は多くの国に進出し、グループ全体では2,500人以上が業務に携わっている。近年のますます精力的な活動のおかげで、一般向け雑誌および業界や企業向けの出版物の誌面を通して、この事務所はわれわれ欧米からも注目されるようになった。こうした経緯から、『CASABELLA』は2013年発行の825号にて、このYKK80ビルを手がけたのと同じ設計事務所によるホキ美術館(2006-10)を取り上げている。自社の活動やその原動力となる経営理念を伝えるイメージを完全に表現する建物を実現するために、YKKは日建設計に白羽の矢を立てたのだ。建築家たちは、どんな地震にも耐えられるような、鉄筋コンクリート造と鉄骨造による地下2階、地上10階のビルを完成させた。彼らはさらに、ビル機能に関わる全消費エネルギー量の管理調整システムを用意し、エネルギー消費量を一般的のオフィスビルに比べて約60%も削減させた。高性能に加えてこの建物を特徴づけるのは、外被と内装に施された特別な処理である。いずれも、YKKという建材メーカーの製品や製造技

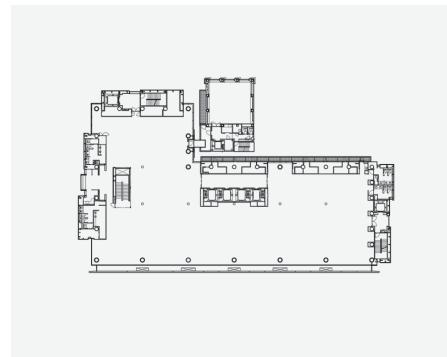
無断での本書の一部または全体の複写・複製・転載を禁じます。  
copyright© 2007-2017 Arnoldo Mondadori Editore  
copyright© 2007-2017 Architects studio Japan



透ける外被



9階大会議室



基準階平面図



断面図

術を、いかに活用できるかを明示するイメージを付与すべく設計されている。建物を正面あるいは斜めから観察すると、ファサードが光に対していかに多様に反応するかがすぐに分かる。実際、正面からはファサードは透明に見え、斜めからは不透明に見える。Y字につなぎ合わせた矢羽型のアルミ押出型材でできたスクリーンが、ファサードを覆う。このアルミ格子と奥のガラス壁の間にはたっぷりとした中空層が設けられ、内側のスクリーンとともに、遮熱効果に寄与する。この連続スクリーンを特徴づける軽

さと両義的な透明さは、内部にも見て取れる。事実、ファサードを覆うのと同じ、華奢なアルミ押出型材でできた垂直の格子スクリーンが、大階段の吹き抜けを取り囲み、裏側から照明を当てた薄いアルミパネルが頭上から雨のように降り注ぐ、目を見張るような演出がなされている。内装は簡素な仕上げで、効率的な業務配置に特別な配慮がなされている。

ここでの全体としてオーソドックスなアプローチは、YKK株式会社が新社屋の建設を依頼する上で重視し

たものだ。こうした選択は建物の立地からも、また建築主が追求する目標、すなわち名刺代わりになり、自社が市場に供給する製品の信頼性をデモンストレーションする建物を実現しようと決めたYKKの意向からも説明できる。日建設計は本件に限らずさまざまな機会に結果を出してきたが、そこからは看過できない問題も見えてきている。事実、日建設計のように大規模な組織設計事務所の設計活動の成果は——これまでと同様に今後も——検証もされずに、小さくまとまつては時代についていけないから「建築家」の在り方を大きく変えた、その結果だと受け取られ続けることは明らかだろう。だからこそ今、日建設計のような建築設計事務所だけが現代の複雑な建設プロセスを真に掌握できるのかもしれない、それゆえ伝統的な建築家は駆逐されるのかもしれない、と問うべき時が来ているのではないだろうか。「小さな建築家たち」はもはや、「優秀なアルチザン」の基準に照らすと、取り替え可能な装飾家とさえ見なされていないのだ。



メイン・ファサード(昭和通り沿い)



主要階段室

作品:YKK80ビル

設計・監理:日建設計/亀井忠夫+中村晃子+土屋哲夫

構造・設備:日建設計

インテリア・デザイン:藤江和子アトリエ(6階・10階内装)

施工:鹿島・戸田・大和ハウス工業建設共同企業体

建築主:YKK不動産

用途:オフィス、銀行支店、カフェテリア

規模:敷地面積 2,640 m<sup>2</sup> / 建築面積 2,060 m<sup>2</sup> /

延床面積 22,574 m<sup>2</sup> / 地下2階・地上10階・塔屋2階

スケジュール:設計 2012年2月-12年11月/

施工 2013年3月-15年6月

所在地:東京都千代田区神田和泉町1番地

# CASABELLA JAPAN リポート

異なる記念碑的性格を与えた。以前の街並みはヴァザーリの建物に覆われ、裏側に隠された。だが、ウッフィーツィが象徴したのは、パラツォ・ヴェッキオの前の広場をアルノ川に面したあまり幅のないボリュームとつなげる、壮大な舞台装置ではない。そこでは華美な装飾とそこで行われた儀式が、メディチ家権力の最終的な確立を賛美する機能を果たした。パラツォ・ヴェッキオに背を向け、ニンナ通りに沿ってサン・ピエロ・スケラッジオ聖堂——1200年の末からこの区域で繰り返されたあらゆる都市改造の犠牲者として運命づけられた——の遺構が残る地点に立つと、ウッフィーツィがフレスコの心臓部に明瞭な亀裂を生んだことが確認できる。また、この複合建築の存在によって明らかにされるのは、その形態的、機能的、建築的な概念自体が、わずか20年ほどの間に歴史の大転換がなされたという最も雄弁な表明だということだ。過ぎ去った時代を消し去ることを運命づけられた新しい時代は、ここでその具体的フォルムを発見したのだ。コジモは、サヴォナローラ派の伝統と共和派の反体制派との間に確立していたつながりをはずたずたにしようと決めた(マッシモ・フィルポ)のと、同じ決意をもって、外科的に、ウッフィーツィ広場をシニヨーリア広場から切り離した。2つの空間は隣り合っていたものの、ヴァザーリの建物によって両者の間に深い溝が差し込まれた。断絶の大きさを理解するには、少し本題から離れて、アニヨロ・ブロンズイーによる2点の絵画を観察するとよい。1564年頃に、ヴァザーリはブロンズイーの後を継いでメディチ王朝の公式画家になった。現在ウッフィーツィに所蔵されるコジモ・イル・ヴェッキオの肖像画と、シドニーのアートギャラリーにあるコジモ1世の肖像は、パラツォ・ヴェッキオを背にしてウッフィーツィ広場に入った時に感じるのと同じくらい、大きな隔たりを感じさせる。大公コジモの肖像では、メディチ家を表す切り株を挿入することによって、ブロンズイーは王家の伝統の最後/最新の後継者としてコジモを表現できた。彼が身につけた洗練された武具も、皇帝から与えられた権威を主張する。ブロンズイーが——他方でボッティチエリやポンタルモがしたように——コジモ・イル・ヴェッキオの相貌に描き出した、実業を通じて獲得した単なる貴族性とは、まったく性質が異なる。そのため、1545年頃にブロンズイーが描いた絵は、予言めいている。ただし、コジモ公を描いた他の肖像画と同じく、この絵で最も印象に残るのはコジモ1世の眼差しなのだ。その

眼はすぐ近くにあるものを無視しているように感じられる。なぜなら、遠くの光景を見ようと、彼の眼差しはここではない他所を射ているからだ。

他所という場——本誌の読者に勧めたいこの研究書に教えられた——は、ウッフィーツィによってフレスコの都市の織物に切り取られたあの空間である。比肩するものがなく、フランチェスコ1世の婚礼に合わせてヴァザーリが新たに造った「廊下」によって雄弁に語る建物。高架になった通路のおかげで、コジモ1世の子孫たちはパラツォ・ヴェッキオとパラツォ・ピッティを自由に行き来できた。彼らの生活、彼らの儀礼、彼らの娛樂は、この空中廊下という隠れ場を通じて営まれた。フレスコは書いている。「文献や史料は廊下の日常的な使用を証言する」。フランチェスコ1世の弟、フェルディナンド1世は「しばしばそこで謁見し、川と都市を眺めながら昼食をとるのを好んだ」。アルノ川の岸に面して、「廊下」はあまりスパンの大きな連続アーチの上に載っている。アーケードは「非常に頑丈」——フランチェスコ・ボッキがすでに指摘したように——で、川の水位が激しく上昇してもびくともしなかった。このアーケードはかくも堅牢だが、ウッフィーツィのファサードのうち司法府と組合が押し込まれた長い開廊に囲まれた広場側を飾る、祝賀的な優美さに欠けている。アーケードが最も確実な基礎であるがゆえに、建物の上層階をより軽やかに感じられるはずだ。ウッフィーツィ建築の意味とその内奥に隠されたメッセージの、この上なく雄弁な称揚と言えよう。権力は不可視のまま、どこか他所に住もう。

## 『CASABELLA JAPAN』創刊10周年記念・

日本建築ツアー：マルコ・ビアージ氏に聞く

小巻哲

去る4月上旬、『CASABELLA JAPAN』創刊10周年を記念した日本建築ツアーの一一行26名がイタリアから来日した。『CASABELLA』編集部のマルコ・ビアージ氏がガイド役を務め、およそ1週間にわたり大阪・京都・東京を中心で古今の建築を見て回った。その模様をビアージ氏へのインタビューによって紹介してみたい。まずは弾丸ツアーの基本スケジュール(実際の行程とは多少異なる)を、案内書より抜き書きしておく。

4月2日(大阪)：夕刻、関西国際空港に到着。なんばパークス/ジョン・ジャーディ、梅田スカイビル/原広司。

4月3日(大阪・淡路島)：希望の壁、光の教会、淡路夢舞台、本福寺/安藤忠雄。

4月4日(京都)：竜安寺、金閣寺、二条城、清水寺、高台寺、祇園エリア。

4月5日(京都→東京)：伏見稻荷、銀閣寺、新宿エリア。

4月6日(東京)：東京都庁舎/丹下健三、代々木体育館/丹下健三、明治神宮、ディオール表参道/SANAA、GYRE/MVRDV、hhstyle.com/casa/安藤忠雄、表参道ヒルズ/安藤忠雄、ルイ・ヴィトン/青木淳、TOD'S/伊東豊雄、ONE表参道/隈研吾、根津美術館/隈研吾、コムデギャルソン/フューチャー・システムズ、プラダ/ヘルツォーク&ド・ムーロン、ミュウミュウ/ヘルツォーク&ド・ムーロン、コーチ表参道/OMA、渋谷エリア。

4月7日(東京)：国際子ども図書館/安藤忠雄、国立西洋美術館/ル・コレビュジエほか、東京国立博物館/渡辺仁・谷口吉郎・谷口吉生ほか、浅草文化観光セン



マルコ・ビアージ氏



日本建築ツアーの募集フライヤー

ター/隈研吾、浅草エリア。

4月8日(東京):築地・月島エリア、皇居、メゾン・エルメス/レンゾ・ピアノ、静岡新聞・静岡放送本社/丹下健三、ルイ・ヴィトン銀座/青木淳、ディオール銀座/乾久美子、MIKIMOTO Ginza 2/伊東豊雄、ルイ・ヴィトン松屋銀座/青木淳、中銀カプセルタワー/黒川紀章、東京銀座資生堂ビル/リカルド・ボフィル、ハイエック・センター/坂茂。

4月9日(東京):全日フリー、離日。

何とも激しい動きであるが、見学した建物は大きく3つに分類できる。日本の古建築、日本人建築家による現代建築、海外建築家による日本での作品。こうした建築ツアーの企画立案の模様から、ビアージ氏に話し始めていただいた。

**マルコ・ビアージ**——私たち『CASABELLA』編集部は、数年前からプロ・ヴィアッジ・アルキテットゥーラという建築旅行を企画する代理店と緊密なコラボレーションをしています。この会社はプロの建築家向けツアーの企画で定評があり、イタリアやヨーロッパ諸国はもとより、世界各地へのツアーも行っています。これまでにも彼らは日本ツアーを開催していて、つい2ヶ月前にはランドスケープ・デザイナーたちを連れて日本の庭園を巡っています。プロ・ヴィアッジの責任者はロベルト・ボージ氏といい、優秀な建築家でもあります。彼はイタリアの大学のほとんどの建築学部や教員たち、すべての建築雑誌にコンタクトしています。『CASABELLA』誌のために建築ツアーを企画し、これに編集部のメンバーがガイドとして加わり、ポルトガルやフィンランドなど興味深い建築が多いところで充実した旅程を組んできています。さらにプロ・ヴィアッジは、ミラノにある私たちの研究所「*lo spazio CASABELLA*」における、「CASABELLA formazione」という建築家のレク



Fig.2:安藤忠雄氏を囲んで



Fig.1:安藤忠雄 | 本福寺水御堂



Fig.3:東福寺・三門



Fig.4:東福寺・南庭

チャーや展覧会などを企画・開催するプログラムに協力してくれています。

今回のケースは、まず私たち編集部に日本ツアへの協力に関する打診がありました。『CASABELLA JAPAN』10周年という機会を捉えて、通常の企画よりも充実した内容にしたいと言うことですね。そこで例えば、建築家と交流のある私たちが直接コンタクトをとって事務所訪問を実現させるなどの特別なオプションを提供し、これまでにない充実した企画になりました。今回は安藤忠雄氏の事務所、伊東豊雄氏の伊東塾、日建設計本社などに伺ったのですが、参加者は感激していましたよ。隈研吾さんはスケジュールが合わなかったのですが、スペイン出身のスタッフが浅草文化観光センターを詳しく案内してくれました。さらに最終日に白井晟一の作品を2つ——松濤美術館とノアビル——追加したのも、私たちが提案したオプションでした。それは参加者募集の時点では決まっていなかった建物です。つまり基本的な行程や訪問先は私たちではなく、プロ・ヴィアッジ側が長年の経験を生かして組んだもので——多くの参加者が興味を持ちそうな建物の選択や、効率よく回るためのルートとか——、その大枠に対して『CASABELLA』編集部が支援したということです。

ツアーアイデアの大半は建築関係ですが、家族同伴の方々もいました。年齢はさまざま、30歳前後の女性が一番若く、最年長は65歳の男性でした。年齢層は広く、平均すると50歳代くらいでしょうか。建築関係といつても、一般的な建築設計の実務にたずさわる建築家だったり、建材会社に勤務する方、芸術文化財監督局——芸術文化財の保護保全を監督するイタリアの行政局です——に所属する建築家、ランドスケープ・アーキテクト、そして私たち『CASABELLA』編集部の数人など、多彩でしたね。

——それにしても訪問先がバリエーション豊かですね。ツ

アーアイデア参加者からの反応が大きかった建物について聞かせてもらえませんか。

**ビアージ**——全員が最も気に入ったのは、京都で訪れた東福寺だったようでした。建物も庭園も素晴らしい、禅寺の独特な雰囲気を味わえました。しかも桜が満開の時期でしたからね。そして誰もが大満足だったのが、安藤忠雄さんの建築。事務所も見学させてもらえ、安藤さんにも会えました。光の教会、本福寺の水御堂。ただ、淡路夢舞台は短時間で見学するには大きすぎたようでした……(笑)。

また、表参道や銀座に並び建つ建築群も皆さん印象深げでしたね。特にヘルツォーク & ド・ムーロンのプラダを気に入った人たちが多くいたかもしれません。それでも、日本に建つ建築の多彩な顔を見て回りましたから、いずれも興味深かったようですね。

——表参道エリアは約1キロの直線上に多国籍の有名建築家の作品がびっしりと立ち並んでいる、世界でも例のない建築エリアだと思います。動物園(Architectural zoo)に喩えられることもあるほどです。どう感じられましたか。奇妙な感じは受けませんでしたか。

**ビアージ**——楽しかったですよ。世界の高級店が並ぶブランド・ストリートですから、あの高密度には合理性があります。最新の建築が連なるさまは、まるで多彩なファサードでできたポルトガルの街路のようで面白かった。それでも私の個人的な意見ですけれど、宣伝・広告のための建物ですから、そのように意識して見るべきでしょう。

モード・ファッショントのロジックに従っている建物ですか、理に適っているわけですね。クライアントがモードのブランドで、立地は商業地区ですから、イメージの建築になるのは当然でしょう。それは建築家のイメージのみならず、



Fig.5: 谷口吉生 | 東京国立博物館・法隆寺宝物館



Fig.6: ル・コルビュジエほか | 国立西洋美術館



Fig.8: 日建設計を訪問



Fig.9: ラファエル・ヴィニオリ | 東京国際フォーラム

むしろブランド・イメージとの混合をクライアント側が求めているという面白い現象ですね。ブランド・イメージ以外の意味を持たなくともいい。それでも有名建築家のイメージが欲しい。建築家のスタイルを宣伝できて、かつブランドのスタイルを表現できる建築が求められるわけですね。その合体から現れ出てくる結果を見るのは、とても面白いことです。しかし、例えば銀座のレング・ピアノによるエルメスは、彼らしくない建築だと思いました。いかにエルメスというブランド・イメージを建築に翻案するかに苦労して、ピアノらしくない建物になったように思えます。エルメスのイメージのほうが勝っているんですね。その一方で、SANAAはディオールの要求にうまく適合したと思います。建築家のスタイルとディオールの洗練さが合致した幸せな例ですね。

——編集者としてビアージさんが気に入った建物について聞かせてください。

**ビアージ**——先ほど話した禅寺の東福寺は、豪奢でなく簡素で素晴らしいでした。安藤忠雄さんの作品。そして丹下健三の代々木体育館も非常に面白かったです。白井晟一の2作品もよかったです。

——白井晟一の建築を見たいという海外の方は少ないと思いますけど……。

**ビアージ**——確かに西洋ではあまり知られていない建築家であり作品です。私は日本で建築史を研究しているJ・K・マウロ・ピエルコンティ氏を通して興味をもちました。ほかの日本人建築家とは異なった、かなり特異で個性的な建築家ですね。誰もがモダニズム建築に向かっていた時代に、白井は別のことを行っていました。その理由を理解できたら面白いと思っています。何よりも彼の作品は非常に質の高い建築です。職人の技を傾けたディテールはとても贅沢な仕上げで、素材の使い方もじつに洗練されていると思います。松濤美術館とノアビルを見て、さらに彼と彼の建築を理解したいという気にさせられました。優秀な建築家だったことは確かなので、もっと研究される価値のある人物だと思います。

——日本では熱狂的な白井ファンがいる一方で、距離をおく人も多いのです。その時に分水嶺となるのは、やはり

モダニズムの時代にあって近代建築のヴォキャブラリーを使わずに、バロック的あるいはマニエリスム的な表現をしていたことなのですね。そこに日本の伝統建築も顔を出したりする。そうした白井の無国籍的な建築を、どのように西欧が評価するのか興味があります。

**ビアージ**——先ほど名前を出したピエルコンティ氏が白井晟一を研究しています。彼の論文が出版されるのを待ちましょうか。実際に、イタリアにもヨーロッパにも白井に関する研究は皆無で何も知らないのです。

私が何よりも興味をそそられるのは、この種の建築がどこから来たのかを知ることです。今回の白井作品の見学では、マウロ・ピエルコンティとマッシミリアーノ・サヴォッラという2人の歴史家が同伴してくれました。彼らは作品を前に、「ここは○○に似ている」、「これは白井が戦前のドイツで見た○○に違いない」と議論し始めました。白井はドイツ留学の間に表現主義建築を見知っていたでしょうし、当時の建築作品や建築思潮を学んでいます。マッシミリアーノ・サヴォッラ——例えば、ヨーロッパの第一次世界大戦の戦没者記念碑などを研究しています——によれば、白井建築におけるいくつかのデザイン・モチーフやディテール、石材の使い方、光の扱い方などは、おそらく白井がヨーロッパで見たものに由来する、と。こうしたレンダリングを解釈する方法が個性的だったということが重要なんだろうと、私は思います。「正統的」であり「個性的」である。彼がどう観察し考えたかが、白井理解には必要なのではないでしょうか。ですから逆に、現在の日本における批評がいかなるものなのか、どう議論されているかを是非とも知りたいですね。

——ところで、今回のツアーでは建築そのものだけでなく、日本でも特徴的なエリアも歩かれたそうですね。道頓堀、祇園、新宿、渋谷、表参道、浅草、銀座……。そのあ



Fig.10: 白井晟一 | ノアビル



Fig.11: 白井晟一 | 松濤美術館



Fig.12: 同、内部の吹き抜け

たりの感想を聞かせてください。

**ビアージ**——スケジュールに押されて自由時間は少なかったのですが、私自身が今回いろいろな都市や地域を巡って思ったのは、ともかく京都が特別な性質の都市だということです。私たちが訪問したエリアは、とりわけ伝統的な地区だったからかもしれません。ミラノのようなイタリア都市から来ると、京都に限らず日本の都市はかなり不安で見知らぬ場所に思えます。「見たことのない場所」という意味です。なぜなら都市の性質が、例えばイタリアと大きく異なっているからです。日本の都市ではインフラストラクチャーが素晴らしく機能していますが、ヨーロッパの伝統的都市に不可欠な要素が欠けています。ここには広場がない、その概念自体が希薄なように感じます。さらに日本の都市の積層し交錯——小さな住宅と高層ビル、住居と労働の場が混在——している在り方は、イタリアにはないものです。それは都市論の観点からは、とても興味深いもので、さまざまな機能や活動が混ざり合っている。つまり、そこにあるものこそが都市だからです。ここでは場の特性を認識するマークが欠けています。ヨーロッパの都市では住居と労働の場が分かれていますが、混在する日本の都市では難しい。その結果として、魅惑に満ちているもののヨーロッパ人の目には読み解くのが困難な都市になっています。私は今回が初めての日本で、それも1週間ほどしか滞在していません。きちんと都市を読むにはもっと時間が必要ですが、現段階で感じるのは、魅力的な場であると同時に居場所がないという疎外感に襲われる場、すべてが組織化された効率的な場であると同時に居心地の悪さを感じてしまう場という印象です。

それにしてもヨーロッパに比べて、日本は都市機構が非常に上手く機能していることは感じました。イタリア人のフォスコ・マライーニ(1912-2004、写真家/登山家/人類学者/東洋学者)は日本に長く暮らし、日本や日本人についての著作もあります。彼の本を読むと、日本人にとって美しいものは自然と関連しているものであって、都市は機能してくれればいいのだと、書いてありました。日本の都市は語源的に「市」、すなわち市場/マーケットと結びついた場であって、機能的であれば美醜は関係ないのだと。これに対して、イタリアの都市の語源は「キウィタス(civitas)」すなわち共同体です。つまり都市とは共に生き暮らすことの表現であり、その点が重視されています。この2つの都



Fig.13:都庁展望室より  
東京の街を俯瞰する

市の在り方は別物であって、だからこそヨーロッパの目から見ると、両者の差異を興味深く感じるのですね。実際に日本に来てみて、その大きな違いは面白かったのですが、どうも私には居心地が……(笑)。

——建築から都市まで、とても興味深いお話をありがとうございました。

**ビアージ**——参加者も大いに喜んでくれ、少し疲れましたが、素晴らしい経験でした。また東京で、あるいはミラノで会いましょう。

[2017年4月9日、新宿・京王プラザホテルにて]

#### 【インタビューを終えて】

このインタビューは帰国直前の忙しい時間帯に行われました。そのため訪問した個々の建物についての詳細は少なく抑えた内容となっています。ご了承ください。

それでも、私たちが知らず見逃しているポイントも示されたように思います。ひとつは都市と広場についてです。8世紀に新たに建造された平安京に遡る京都にも、17世紀の江戸から続く東京にも、確かに「広場」は少ないようです。京都には寺社の境内があり(多くは拝観料が必要ですが)、東京には少なからずの公園があります。しかしギリシアのアゴラに由来するような広場は見当たらないのです

ね。皇居前広場は警戒厳重だし、かつての新宿西口広場は立ち止まってはいけない「通路」にされてしまったし。また住居と労働の場が、ビアージさんには混在して見えるのですね。私たちは地域地区の指定によって各エリアは分かれているという認識なのですが、視覚的に明快な区分がない日本の都市。それが私たちには逆に居心地よかったです。こうした良し悪しとは違うギャップを、とても興味深く感じました。

白井晟一(1905-83)に対する興味には驚きました。耳にして思わず、「えーっ」と言ってしまいました。もっと聞いたかったのですが、時間切れでした。白井ファンの多くが重ねて語る建築家がイタリアにいますね。カルロ・スカルパ(1906-78)。少し意味合いは違いますが、ともに歴史家が判断に困る建築家なのだと思います。彼らについて考えることは、モダニズム建築への問い合わせに繋がるような気がしています。

ともあれビアージさんを含めた参加者の方々、駆け足の日本ツアーを楽しんでくれたようで何よりです。別に私が言うことでもありませんが、ご苦労さまでした。

#### 【図版提供】

Fig.2:Giuseppe Lepri | Figs.3, 4:Marco Biagi

Figs.5, 6, 9, 12, 13:Anita Bianchetti

Figs.7, 8:Giorgio Piovesan | 上記以外:スタジオ・コマキ